

「敬語の指針」の考え方と

今後の学校教育に

おける敬語教育の

方向性



蒲谷 宏

1 「敬語の指針」の性格

「敬語の指針」（以下、「指針」）は、文部科学大臣の諮問に対して、二〇〇七（平成一九）年二月に文化審議会から答申されたもので、「敬語が必要だと感じているけれども、現実の運用に際しては困難を感じている人たち」を主たる対象として、「社会教育や学校教育など様々な分野で作成される敬語の『よりどころ』の基盤、すなわち、へよりどころのよりどころ」として、敬語の基本的な考え方や具体的な使い方を示すもの」です。

つまり、「指針」は、あくまでも（へよりどころのよりどころ）なのであって、これを直接教育の分野などに持ち込むことを意図しているわけではないのです。したがって、学校教育においても、「指針」をよりどころとした、それぞれの状況や事情に合わせた「個々の指針」を作ることが大切になります。また、この指針で主たる対象としている敬語は、現代共通日本語の敬語であって、古典の敬語や方言の敬語全般についてまでを含んで述べようとするものではあ

りません。

2 「敬語の指針」における「敬語」の捉え方

「指針」では、「敬語」について基本的に次のように考えています。

○敬語は、人と人との「相互尊重」の気持ちを基盤とすべきものである。

○敬語の使い方については、次の二つの事柄を大切にすることがある。

①敬語は、自らの気持ちに即して主体的に言葉遣いを選ぶ。「自己表現」として使用するものである。

②「自己表現」として敬語を使用する場合でも、敬語の明確な誤用や過不足は避けることを心掛ける。

要するに、「敬語」が「相互尊重に基づく自己表現」として捉えられることの重要性を強調しているのです。敬語の形式面を体系的に整理することも大切なのですが、学校教育においては、そこだけに止まっただけではならないでしょう。

「指針」は3分類を5分類に変えた、という点だけが過度に注目されていますが、敬語の分類数自体は、それほど重要な問題ではありません。まず考えなければならないことは、敬語の持っている敬語としての性質です。それを明らかにすることが、結果として、敬語の分類の問題につながるものであって、分類が先にあるわけではありません。このことを特に国語教育にかかわる先生方には理解していただきたいのです。さらに言えば、「指針」が提示しているのは、実は5種類ではなく、尊敬語、謙讓語Ⅰ、謙讓語Ⅱ（丁重

語)、丁寧語、美化語、そして謙讓語Ⅰ＋謙讓語Ⅱの6種類なのであって、そのことはあまり問題にされていません。もちろん敬語の整理を複雑にしたいということなどではなく、「敬語的性質」が異なるものを同じ種類だと言って教えるのがよいのか、似た点はあるが違う種類なのだと教えるのか、そのことを考えてほしいという趣旨なのです。

また、敬語の名称や説明のための用語も、それだければならないというものではありません。筆者も個人的には、「尊敬語」や「謙讓語」という名称から脱却したほうが良いと考えています。

3 学校教育における敬語教育のあり方

端的に言えば、敬語教育は、語彙教育や文法教育ではなく、コミュニケーション教育として位置づけることが重要だと思います。そうすることで、敬語の持つ本当の意味が見えてくるのではないのでしょうか。敬語を単なる言葉として考えるだけではなく、それをコミュニケーション全体として扱っていくことが学校教育においても求められているのだと言えるでしょう。

特に高校生に必要なことは、「相互尊重に基づく自己表現」という敬語の理念と具体的な使い方との関連です。敬語の形式的な問題だけではなく、なぜ敬語を使う必要があるのか、敬語を使うことでどういう人間関係が築けるのか、といった根本的なことならと関連させて、具体的な使い方を考えるとよいのではないのでしょうか。「指針」第3章の後半では、敬語から敬語表現、コミュニケーションの問題へと展開しているのも、そのような思いが込められている

のです。最近では「空気が読めない」ことがよく話題になります。最近では「場」の雰囲気に合わせて合わせるだけではなく、自らが「場」の状況を変えていく力を持つことが真の「自己表現」につながることも重要な点になるでしょう。

人と人がよりよい社会を作ること、そして、人が人としてよりよく生きていくための知恵としての文化を受け継いでいくこと、そうした意味でのコミュニケーション教育の観点から敬語を生かしていくことが期待されるのです。

【参考文献】

『国語表現Ⅰ 改訂版』（二〇〇七）『国語表現Ⅱ 改訂版』（二〇〇八）

三省堂

蒲谷宏・川口義一・坂本恵（一九九八）『敬語表現』大修館書店

蒲谷宏・川口義一・坂本恵・清ルミ・内海美也子（二〇〇六）『敬語表現教育の方法』大修館書店

教育の方法』大修館書店

蒲谷宏（二〇〇七）『大人の敬語コミュニケーション』（ちくま新書）

筑摩書房

『教育委員会月報（特集）敬語の指針』文化審議会答申について（二〇〇七年五月号（第五九卷二号））文部科学省

年五月号（第五九卷二号）文部科学省

かばや ひろし 早稲田大学大学院日本語教育研究科教授。専

攻は、日本語学・日本語教育学。おもに、待遇コミュニケーション（教育）論。文化審議会国語分科会委員を務め「敬語の指針」の作成にも参画。三省堂「国語表現」編集委員。